

# 楽しく花作り

近年の猛暑対策として、蔓性植物を利用した「緑のカンテン」が注目されています。アサガオ類や二ガウリなどに

月おきぐらいに緩効性肥料を置き肥します。

高温時期は鉢土が乾かないように、特に鉢植えはこまめに水やりします。秋になったら、鉢土の表面が乾いてから、鉢土の表面が乾いてから

夏から秋に蔓を2〜3節ずつ切り、下葉を落としてさし芽します。

雨明けには魚種にかかわりなく、瀬渡し船蝶栄丸＝0996

30〜35歳のクロが5、6歳のバリ（アイゴ）が2、小サバ、コノシロがほぼ96(73)3318。根占や内之浦一帯の砂浜〜20歳のシロギスが10〜1.5㎡のシブダイがフバ、イサキが交じる。今シング海遊館＝0994(44)

で手のひらサイズの梅雨のチヌ。投げ釣りやグチ大アジがほぼつぼつ。船釣ニベ、ネイゴ（カンパチ）＝099(472)1227。浜で手のひら〜足裏のヒアアで10〜20匹。例年よりは地磯で1㎡前後のシモ交じる。中ムロ、大ムロイラー＝0997(23)1129。ダイが好調。65歳が7、とも。アジやサバはまず2〜5㎡のネイゴも釣れり、足裏サイズのチヌもりでシブダイやアジ、イ渡船かいゆう丸＝090日新聞提供

魚の釣り情報誌

相模原市の知的障害者施設「津久井やまゆり園」で入所者19人が殺害された事件は26日、発生から3年を迎える。「障害者は不幸をつくることしかできない」。こう主張した加

害者に真正面から立ち向かうべき私たち社会は、どのような心を育て、何を共有していくべきだろうか。鹿児島県内の識者に、それぞれの考えを聞いた。

## 相模原殺傷事件から3年

## 鹿児島県内識者に聞く



みのも・りょうすけ 1949年4月生まれ、肝付町出身。東京教育大学院教育学研究科・博士課程単位取得後退学。障害児心理学に詳しい。日本福祉心理学会理事。始良市障害者自立支援協議会長。鹿児島市就学指導委員会審査委員。

「同じ人間と気付かされた」。授業で接する大学生には「障害者が幸せを感じる瞬間はあるのか」と疑問を持つ人もいる。自分とは違う存在と感ずるからだという。こうした学生が、障害者施設で実習を受けた後の反応が興味深い。「同じ人間と気付かされた」

事件の本質を捉え、予防策を考えるためには、加害者の価値観や取り巻く環境を徹底的に分析すべきだろう。発生から3年たつが、生育歴や就職理由、障害への理解度など不明な点が多いことが気がかりでならない。加害者は特殊な思想の持ち主ではない。各自の成長過程で、障害者との関わりがどの程度あったかによって、理解の深さが変わるとも事実はある。

鹿児島国際大学院教授  
養毛 良助さん

## 「人間観」問う契機に

事件の節目に改めて障害について考えることで、それぞれの「人間観」を見つめ直してほしい。（中元聡史）

や「暗い印象があったが、実際は明るい面も多い」と語り出す。体験を通した気づきほど、重要なものは無いと感じる。障害の有無は確率の話であり、障害者が存在しない世の中は考えられない。自分自身が障害者として生まれた可能性もある。だからこそ、社会全体で支える仕組みが求められる。特に普段から接する施設職員に対しては、継続的な研修や働きやすい環境づくりが求められることは言うまでもない。障害は「大切だが、日ごろ忘れていないこと」を教えてくれる。目の不自由な人に対し、相手の名前を呼んであいさつすると、「コミュニケーション」が円滑に進むことが好例だ。

社会福祉法人落穂会理事長

水流 純大さん



つるすみひろ 1964年3月生まれ、鹿児島市出身。鶴丸高校卒業後、横浜国立大学経済学部。障害児入所施設あさひが丘学園施設長。2020年燃ゆる感動かごしま大会専門委員会委員。県知的障害者福祉協会会長。

## 地域の防犯力高めて

3年くらいでは風化しないような衝撃を残した事件だが、われわれにもたらした影響は大きく二つある。「施設の安全、防犯体制の見直し」と「偏見に対しての取り組みの重要性」だ。

安全性確保については、地域に開放された施設を目指していることとあり、入門ゲートを設けるなど、地域との関係を断ち切ってしまうことは、すべきではないと考えている。そもそも事件のあった施設は、施設管理など安全性に問題があったわけではなかった。対策として、最新の防犯設備を導入したり、不審者対応訓練を充実させたりしたが、限界はある。重要なのは近隣住民との交流を地道に深めて「顔が見え、名前を呼

び合える」関係を構築し、地域の防犯力を高めていくことだ。障害者への理解は深まりつつあると考えているが「社会の荷物」と考えている人がいる現実もある。ただ、われわれから「受け入れてくれ、分かってくれ」と一方的に、要求することは意味を持たない。

双方向のコミュニケーションを図るために、事件後は町内会の忘年会の会場として施設を解放するなど、努力を続けてきた。その中で、施設職員と利用者も加わって、二十数年途絶えていた地域の郷土芸能「棒踊り」の復活に貢献することができた。地域への浸透が深まったことを実感できるいい経験になった。

（中元聡史）



絶望新

悩みに耳を傾け続けてきた同番組だが、イベントの開催は初めて。

加藤さんは40年を超えるパーソナリティーとしての活動を振り返り、「相談者は自分の人生に行き詰まり、絶望している方が多い」